

【審査論文】

『紙文夾』 「嬉しさを」 歌仙分析

佐藤 勝 明

An analysis of Kamibasami (Part2)

SATO Katsuki

要旨

蕉風以外の未注釈の連句作品を分析する第二弾として、無倫編『俳紙文夾』(元禄十年秋序)に収められる、嵐雪・無倫・艶士・止水による四吟歌仙を対象とする。そして、その分析により、嵐雪と無倫らの間に不協和音は感じられず、芭蕉流の付け方が共有されていると見られるもの、各付合では詞の連想に頼った側面もあり、一卷全体では変化を重んじる意識が希薄であることを指摘する。

キーワード… 俳諧・元禄期・連句・無倫・紙文夾

本誌前号で無倫編『俳紙文夾』(元禄十年秋序)の「浦紅葉」歌仙を取り上げたことに続け、本稿では、同書所収の「嬉しさを」歌仙を分析対象とする(『紙文夾』に関しては前号掲載稿に記したことゆえ、説明を省略する)。連衆は嵐雪・無倫・艶士・止水の四人で、蕉門の高弟である嵐雪が主客として招かれたことに興味をそえられる。「浦紅葉」歌仙の分析からは、句意付が主流でありながら詞の連想に頼った付けも多く見られること、付句一句のおもしろみを追求することが多く、想像力の駆使と詞を選び抜く努力を不可欠とする芭蕉流の疎句とは異なっていること、の二点が確認された。嵐雪参加

の一卷でそれらはどうなっているかが、この歌仙に対する主たる関心事となる。なお、連衆の艶士は其角らとも交流した調和門の俳諧師で、止水も調和門の三物連衆。各付合の分析では、①作者は前句をどう理解し、とくにどの点に着目したか「見込」、②その見込に基づき、この句ではどのような場面・情景・人物像などを描こうと考えたか「趣向」、③その趣向に従い、どのような素材・表現を選んで一句にまとめたか「句作」、という三段階による分析方法を用いる。底本には『元禄江戸俳書集』(白帝社 昭和41年刊)所収の翻刻本文を用い、綿屋文庫蔵本を参照した。句の掲出にあたっては、原典

に忠実であることを第一義としつつ、字体は通行のものに統一し、濁点と振り仮名（カナは原典にある通り）を私に付した。古典文学作品の引用では、基本的に日本古典文学大系（岩波書店）の翻刻に従った。

歌仙

嬉しさを鷹に見せたる扇哉

嵐雪

発句 夏六月ないし三夏（扇） 生類鳥

〔句意〕今日の嬉しさを模様の鷹に託して見せ、扇を間に挨拶することだ。

〔備考〕「扇」は涼を得るための具であると同時に、威儀を正すためのものであり、連歌・俳諧の会席にも持参するのが習いであった。『はなひ草』『毛吹草』等に六月、『通俗志』等に兼三夏の扱ひ。「鷹」は冬季の扱ひゆえ、これを実のものとするはできず、ここはめでたい絵柄として扇に描かれたものと解される。めでたさを代表する「一富士二鷹三茄子」の俚諺には「四扇五煙草六座頭」が続くように、「鷹」と「扇」はともに縁起がよいものとして結びつき、扇面には「松鷹」などの図柄もよく用いられる。

径二筋鳶尾わすれ草

無倫

脇 夏四・五・六月（鳶尾・わすれ草） 植物草

〔句意〕二本の小さな道が合うところに、一八や萱草が咲いている。

〔付合〕①前句が訪問者の挨拶であることを受けとめ、②その道中の景観を想像しつつ、訪問を謝する思いも伝えようと考え、③二筋の小径は合流し、そこに鳶尾や忘れ草が咲いているとした。

〔備考〕「径」は「小径」に同じく、幅の狭い小道をいう。「二筋」はそれが二本あること（「二」は「二鷹」からの連想でもあろう）で、ここは二本の小道が合流するY字路を表し、嵐雪と無倫の邂逅を象徴させたのであろう。

「鳶尾」はアヤメ科の一年草である一八・子安草のことで、『はなひ草』等に四月の扱ひ。「鷹」に合わせて「鳶」の字を使ったことは間違いなく、こは敢えて「鳶尾」をトビと読ませ、絵の鷹だけに飛び忘れてここにいるとの洒落を込めたと解しておきたい。「わすれ草」はユリ科の多年草である萱草の異名で、『はなひ草』等に六月、『毛吹草』等に五月の扱ひ。「忘れ草」の名は、身に付けると憂さを忘れることによるといい、前句の「嬉しさを」受け、貴方の訪問は憂いを忘れさせると付けたのである。

筒輪を越す呼井の水の杓はねて

艶士

第三 雑 水辺体

〔句意〕掘り抜き井戸を汲んだところ、水は井筒を越してはねてしまひ。

〔付合〕①前句を路地が多い下町の景と見定め、②路地の交点には井戸がよくあることを思い起こし、前句・脇の挨拶がもつ弾む心もいかそうと考え、③呼井戸の水を汲めば側を越えてはねるとした。

〔備考〕「筒輪」は「井戸側」の「側」に同じく、井戸の側壁を囲む井筒のこととおぼしい。「呼井」は「呼井戸」に同じく、深く掘って地下水を湧出させるようにした井戸。「杓はねて」は汲んだ水がはねたということ。

秋の鯉はたゞせんば煎

止水

初才 4 三秋か（秋の鯉） 生類魚・食物

〔句意〕秋の鯉はただ船場煮にするのがよい。

〔付合〕①前句の中に井戸水を汲む庶民の姿を認め、②共同井戸の回りぐり広げられる女性たちの世間話を想像し、その会話を具体的に示そうと考え、③秋鯉は船場煎に限るといふ、その場で発せられる文言で一句にした。

〔備考〕「秋の鯉」は秋に獲れる鯉で、日本近海を春以来北上していたのが

南下したものの。脂がのっているものの、初鯉を珍重した江戸時代は、夏の鯉に比べて劣るとされた。「せんば煎（船場煎）」は「船場煮」に等しく、魚類を野菜と一緒に塩味で煮込む料理法をいい、大坂船場の商人が材料を無駄なく使う精神から考案したとされる。

月は洩れ雨はとまれと大工小屋

無倫

初オ5 秋八月ないし三秋（月） 月の句 天象・降物・居所・夜分

〔句意〕月光が洩れて雨は降り止まれと、大工の宿泊所から話し声がする。

〔付合〕①前句を大人数の賄いを担当する者の言と解し、②多くの労働者が共同生活する場を想起して、明日の天候を気づかうさまへと想像を進め、③大工小屋からは「雨はやんで月が雲間から照らしてくれ」の声がするとした。〔備考〕「大工小屋」は工事中に大工職人が泊ったり休憩したりする小屋。

蓬としらで菊咲を待

嵐雪

初オ6 秋八月か（菊咲を待） 植物草

〔句意〕それが蓬であるとも知らずに菊の花が咲くのを待っている。

〔付合〕①前句が素朴な願いであることに着目し、②それを無知な者のこととして、その無知ぶりを別のことで表そうと考え、③実は蓬であるとも知らず、菊と信じて開花を待つとした。

〔備考〕「蓬」はキク科の多年草で、秋に目立たない花を咲かせるも、葉を使った餅が上巳の節句に食されることから、「蓬餅」「蓬摘む」が『はなひ草』等で三月に扱われる。「菊」は重陽の節句に関わるもので、諸書に九月の扱いながら、ここは「咲を待」で八月ころと見てよいだろう。

碁笥とるも粧ひぞ憎き女也

止水

初ウ1 雑 恋（粧ひ・憎き女） 人倫

〔句意〕碁石入れを手取るのも、その粧いが心憎い感じの女である。

〔付合〕①前句を世間の諸事にうとい人物と見換え、②宮廷の女官などをそれにふさわしいとして、その風情を描こうと考え、③よく装って碁笥を手にする姿が心ゆかしい女であるとした。

〔備考〕「碁笥」は碁石を入れる容器で、ゴゲとも発音する。碁は平安時代の宮中で好まれ、女官たちがその主たる担い手であった。「粧ひ」は衣服や装飾品などで身なりを飾り整えること。「憎き」には疎ましい・見苦しいの意も心ゆかしいの意もあり、ここは憎らしいほどに心が惹かれるのであろう。

その絵その文たれくも見よ

艶士

初ウ2 雑 恋（文） 人倫

〔句意〕その絵画や文章のすばらしさを、誰も誰も見るがよい。

〔付合〕①前句を麗しい貴族階級の女性と見定め、「碁笥」にも着目して、②その人が種々の文雅に遊ぶ場面を想像し、「碁」から「書・画」を連想して、③それらの絵や文を誰でも見なさいという、女の発話で一句にした。

〔備考〕中国で士君子の愛好する技芸に琴・碁・書・画があり、これを「四芸」とも「琴棋書画」とも呼んで、日本の風流人たちの間でも流行し、画題としても知られていた。この句に「絵」と「文」が出るのも、右の知識を背景に、これらが前句の「碁」と呼応するかにほかならない。一句として恋の情は薄いものの、「文」は手紙をも意味するところから、恋の詞となる。

後朝の柱に粧る雪の笠

嵐雪

初ウ3 冬十一月（雪） 恋（後朝） 居所・降物

〔句意〕逢瀬を遂げた翌朝の柱には、雪道で使った笠が掛け飾られている。

〔付合〕①前句を恋しい男から手紙を受けた女の心の声と見換え、②二人が会う場面を想定しつつ、その翌朝へと想像を進め、③後朝の別れに際して、雪の中をやって来た男の笠は柱に飾ってあるとした。

〔備考〕「後朝」は「衣々」に宛字したもので、男女が共寝した翌朝をいい、夫婦の離別や一般的な別れの意にも用いる。「荘る」はカザルと読み、ここは笠が柱に掛けてあることをさす。「雪の笠」は上に雪が積もった笠のことで、ここは今も雪が付いているのではなく、男が雪の中をやって来たことを表象する。この句で「雪」を出したのは、それが恋の場面にふさわしいと同時に、「行き」を含蓄することにもなるからであろう。「粧ひ」と「荘る」は語として近く、一句をはさんでの使用には問題もある。

踏歌たふかの男おとこ今の風来ふうらい

無倫

初ウ4 春一月(踏歌) 芸能・人倫

〔句意〕踏歌で舞っている男は今にいう風来人である。

〔付合〕①前句を秘かに男と会っていた場面と見換え、②その男は遊侠の徒にも近いような者であろうと考え、「雪」から「あらればしり」の語を導いて、③その踏歌をしている男は今の世の風来坊であるとした。

〔備考〕「踏歌(踏歌)」は中国から伝わった古代の群衆歌舞で、多人数が足を踏み鳴らしながら歌い舞う。日本でも踏歌節会として朝儀に加えられ、室町時代後期に中断した後、江戸時代に復活して幕末まで行なわれた。召されて舞うのは主として都の男女で、男踏歌は正月十四日、女踏歌は同十六日と定められたほか、熱田神宮や興福寺などの社寺でも正月中に行なわれ、そのいくつかは現在まで続いている。ここで男をその舞い手としたのは、「踏歌」を「あらればしり」ともいうところから、前句の「雪」に合わせてこの語が選ばれたものに相違ない。「風来」は住所不定者や気まぐれな人をいう。

打畑うったに退しそいた伏見ふし惜をしふ成なり

艶士

初ウ5 春二月(打畑) 名所

〔句意〕畑を打ち耕すにつけ、伏見を引き払ったことが惜しく思われてくる。〔付合〕①前句をかつては踏歌に参加していたの意に読み換え、②今は繁華な地を離れて暮らす者が時に昔を恋しがる場面を想像し、③畑を打ちながら、退く前の伏見の暮らしが惜しく感じられるとした。

〔備考〕「打畑」は「畑打」に同じく、種を蒔く準備に畑の土を掘り起こすことで、『はなひ草』等で二月の扱ひ。「退いた」は後退・退出・退隠などをしたことで、ここはシゾイタと読む。「伏見」は現在の京都市伏見区で、豊臣秀吉の築城後は政治の中心地となり、江戸時代初頭に城が廃された後は、大坂と京都を結ぶ淀川沿いの宿駅として栄えた。また、寛文九年(一六六九)以降は伏見奉行体制が確立し、幕府の直轄都市となっていた。

花はなの中なか行ゆく鐘かねぞけうけうとき

止水

初ウ6 春三月(花) 花の句 植物木

〔句意〕花見の雑踏の中、槍を掲げて行く武士がいとわしい。

〔付合〕①一般的な連想により、前句を伏見時代の花見が恋しいの意と見定め、②前句に「惜ふ」の語があることも考慮して、花見の場で好ましくない事態が起こる場合を考え、③満開の花の中を行く槍は興おこざめであるとした。

〔備考〕「花の中」は花の盛りを目当てに人々が集まっている中でのこと。「鐘」は「槍」に同じく、長柄の先端に剣を付けた武器で、ここはそれを持つた者を表す。庶民が花を楽しんでいるのもかまわず、槍持ちの従者を従えた武士が傍若無人の態度をとり、鬻うぎを置おき買かっているのである。「けうとき」は気に入らず興おこざめな物事・状態に対していう語で、多くは距離を置きたい気持ちを込めて使う。「伏見↓墨染桜・花ノ円居」(『類船集』)の連想

に基づいた付けであり、「花の円居」は花見の集まりをいう。

餅売が投置小判取かねて

無倫

初ウ7 雑 人倫

〔句意〕客が投げ置いた小判を餅売りの主は取ることもできず。

〔付合〕①前句が興ざめな出来事であることに着目し、②その場に見られそうな別の嫌なことを探り、③餅売りが客の置いた小判を取りかねるとした。

〔備考〕「餅売」は餅の販売を業とする人。ここは焼いた餅を商っているのであり、花見の場に設けられた掛茶屋の類であろう（『類船集』に「餅↓茶屋」）。「投置」は物を無造作に置くこと。「小判」は代表的な金貨で、その一両は銭の四千文に相当。餅の代金に小判はあまりに大仰であり、釣りを出す側からすれば、これも「けうとき」ことに違いがない。「取かね」は、捕捉しそこなつたのではなく、取ることをためらっているのである。

此夕暮の鳥辺野を問う

嵐雪

初ウ8 雑 無常・夜分

〔句意〕この夕暮れになつてからの鳥辺野を訪ねる。

〔付合〕①前句の小判には何か理由があるはずだとして、餅を墓前への供え物と見換え、②供養を兼ね、墓の管理などを茶店（もはや掛茶屋ではない）に依頼する場合を想定し、③夕暮れの鳥辺野を訪ねて墓参するとした。

〔備考〕「鳥辺野」は「鳥辺野」とも書き、現在の京都市東山区今熊野の地名で、古くから火葬場があり、墓地も多いことから、無常を象徴する場所として知られる。「問ふ」は「訪ふ」に通用。「餅」を墓前に供えるもの（『類船集』に「団子↓墓参」）と見ての付けであり、「鳥」と「餅」の付合関係（鳥を齧で捕えることから、『類船集』に「餅↓鳥さし」とある）も考慮されていようし、

「取」から「鳥」への同音の連想もあつたことであろう。

那波集を心ひとつの撰み種

止水

初ウ9 雑

〔句意〕那波の詩集をわが心の唯一の拠り所として選んだものだ。

〔付合〕①前句で無常の地を訪ねたことに着目し、②その心を慰めるものとして清廉な者の著作を想定し、③那波集だけを心に選んで愛読するとした。

〔備考〕「那波集」は江戸時代前期の儒者である那波活所の詩集とおぼしく、先の「碁笥」「絵・文」に加えて、琴棋書画が揃つたことになる。活所は藤原惺窩門の四天王に数えられ、和歌山藩主徳川頼宣に仕えては、主君にも直言を憚らず道を説いたことで知られる。その詩は没後刊行の『活所遺藁』（寛文六年刊）などに見られ、これも同書を想定しているのかもしれない。「心ひとつ」は心中でそのことだけを考えること。「撰み種」は選んだ品。

骨茶打込土釜蟹の眼

艶土

初ウ10 雑

〔句意〕骨董品の蒐集と茶の道に打ち込み、土釜や扇に眼を光らせる。

〔付合〕①前句を好みがはつきりしている人と見込み、②趣味と実益を兼ねた業について張り切るさまを想像し、③骨董と茶の湯が好きで、土釜や扇の鑑定にも余念がないとした。

〔備考〕「骨茶」は用例未詳ながら、骨董と茶道を表すと見られる。「土釜」は土を焼いて作つた釜。「蟹の眼」は扇の要の異称。発句が「扇」を詠んだことから、同字の重用を避け、「眼」に鑑定眼の意を掛けたのもあろう。

名月の礎来ル程戸を明て

嵐雪

初ウ11 秋八月(名月・礎) 月の句 天象・居所・夜分

〔句意〕名月の夜、礎を打つ音が入ってくるほどに戸を開け放つて。

〔付合〕①前句を風流三昧に暮らす人と見定め、②その人は各季節の風雅にも敏感に対応するであろうと考え、③近隣の礎の音が入るのもかまわず、名月に戸を大きく開いているとした。

〔備考〕「礎」は「砧」に同じく、木槌で布を打つて柔らかくすること。月下に女性が行なう業として詠まれることが多く(『類船集』に「礎↓月の下」)、『はなひ草』等に八月の扱ひ。「来ル程」は近隣で打つ礎の音が入ってくるくらいにの意。その音は、和歌伝統の中では聞怨の情などを含んで哀切なものとされる一方、「世に住まば聞と師走の礎哉 西鶴」(『蓮実』)のように、俳諧では現実的な生活音として詠まれることも少なくない。

つめり啄つづつ虫むしの呷あはき

無倫

初ウ12 秋七月ないし三秋(虫) 恋(呷き) 生類虫

〔句意〕つねったりかんだりしながら、秋の虫のようなささやき声を出す。

〔付合〕①前句を男を待つて礎を打つさまと見換え、②男を迎えた寢屋での光景を想像し、③つねってはかみ、虫のささやきさながらに睦み合うとした。

〔備考〕「つめり」は「抓り」で、指でつねること。「啄つづ」は「啄つづき」の音便形で、本来は鳥が嘴でつつくことをいい、ここは歯を立てることをさしていよう。「つ」は完了の助動詞で、二つの動作が並列して行なわれることを表わす。「虫」は秋に鳴く虫のことで、「月」と密接な関係にあり(『類船集』に「月↓虫の音」)、『増山井』等に七月、『はなひ草』等に兼三秋の扱ひ。「呷あはき」は「囁ささき」に同じく、小声でひそひそ話すことをいい、恋の詞として扱われる。そもそも、秋の虫の音は、求愛行為として雄が羽をすり合わせて出すもので、いずれにせよ、その「呷あはき」は擬人法にほかならない。

漸寒やまひみ居いり湯ゆにはゆき石の音

艶士

名オ1 秋九月(漸寒み) 恋(句意による) 居所

〔句意〕少し寒くなり、石を使う音が風呂場に響いて気恥ずかしい。

〔付合〕①前句を房事のさまと見定め、②その備えに入浴する場面を思い描き、③漸寒の時節、風呂で使う石の音がきまり悪いとした。

〔備考〕「漸寒み」は「漸寒」に接尾語「み」が付いたもので、「漸寒」とほぼ同意。「漸寒」は冬が近づいて感じる寒さをいい、諸書に九月の扱ひ。単なる季節の会釈あしらいではなく、人肌の恋しい時期であることを感得させて、巧みな語の選択と言える。「居いり湯ゆ」は別にわかれた湯を移し入れた風呂のことで、江戸時代はこれに限らず、蒸し風呂に対する水風呂すい風呂一般をもさしていた。「はゆき」はきまりが悪く恥はずかしいこと。「石」は銭湯などの流し場に置かれた石のこと(『類船集』にも「石↓風呂」)で、陰毛を擦り切るためなどに用いられた。「礎」「虫」「石」と三句に音を発するものが扱われている。

我身わがみにほれてなびく期きもなし

止水

名オ2 雑 恋(ほれて・なびく) 人倫

〔句意〕わが身へのうぬぼれが強く、男の誘いになびく時などない。

〔付合〕①前句から身繕いに余念のないさまを見込み、②それは自己愛が強く気位の高い女であろうと考え、③自信過剰で男になびくこともないとした。

〔備考〕「我身にほれ」は「うぬぼれ」というに近く、自分を過大に評価して得意になることである。「なびく」は人の意向に従うことで、とくに女が男に言い寄られて承知すること。「期」は時・折の意で、「石↓暮」(『類船集』)の連想から、「暮」と同音の「期」を導いたものと察せられる。

藻塩草もしほくさ古筆紙衣かみこの色を絶たえ

無倫

名才3 冬十・十一月ないし三冬（紙衣） 恋（色を絶） 衣類

〔句意〕古筆を手放す暮らしに紙子の色も抜け、色事とも無縁になつて。

〔付合〕①前句を私にほれてなびく女はいないの意に読み換え、②落ちぶれた浪人などを想定しつつ、「なびく」に対応する詞の選択にも意を用いて、③集め置かれた古筆も失せ、紙衣の色も消え、色めいたこともないとした。

〔備考〕「藻塩草」は塩を採取するために用いる海藻で、掻き集めて潮水を注ぐところから、和歌では「掻く」に「書く」を掛けて用いることが多く、歌などの詠草や手紙などをさす。ここは前句の「なびく」に合わせつつ、「古筆」を導くための措辞であろう。「古筆」は古人の筆跡で、平安・鎌倉時代に書かれた和歌などの名蹟をいうことが多い。「紙衣（紙子）」は柿渋を塗った紙製の衣服をいい、『毛吹草』等に十月、『はなひ草』等に十一月、『せわ焼草』等に兼三冬の扱い。本来は律宗の僧が用いたもので、安価で軽く丈夫なことから、旅の必需品であるほか、浪人の代名詞ともなり、風流人の間でも好まれた。「色を絶」は色彩が消えてしまうことで、容色・風情などが損なわれることや、男女の仲が途絶えることをもいう。ここは、家に伝わる古筆も絶え、紙衣の色も絶え、恋愛事も絶えたというのであろう。

底のこころを貝焼の紋

嵐雪

名才4 雑 食物

〔句意〕心の底に秘めた思いを焼いた貝殻の文様に見る。

〔付合〕①前句から世俗的な欲を離れたらしいさまを見て取り、②しかし本心はまた別のところにあるはずと考え、占いにそれが現れる場面を想像し、③貝を焼いた模様に奥底の心が出ているとした。

〔備考〕「底のこころ」は「底心」に等しく、表面からは知られない奥深い本心のこと。「貝焼」は帆立などの貝殻を使って魚介類を焼く調理法で、「紋」

はその貝殻にできる模様であろう。周知の通り、古代中国では獸骨を焼いての卜占が行なわれ、「しらぐ」と碎けしは人の骨か何 杜国／烏賊は糸びすの国のうらかた 重五（『冬の日』）「狂句こがらしの」歌仙）のように、この知識を踏まえた創作もすでに試みられている。嵐雪の脳裡に『冬の日』の付合がよぎった可能性は大きく、へ戎の国のイカを使った占いを日常的な次元に移し、へ貝焼の貝を使った占いを創出したと見られる。そして、その「貝焼」は、やはり焼かれる「藻塩草」から導き出されたのであろう。

稚貞さへ御師は口弁りて

止水

名才5 雑 人倫・神祇（釈教）

〔句意〕まだ幼い顔をした者さえも、御師は実によくしゃべくつて。

〔付合〕①前句を他者に占ってもらう場合と見定め、②祈祷師が人を煙に巻くようにまくしたてるさまを想像し、③御師は童顔でもよくしゃべるとした。〔備考〕「稚貞」は幼児のような顔つきで、ここはイトケナキカオと発音するのであろう。「御師」は「御祈祷師」の略で、伊勢神宮など特定の社寺に所属し、参詣者に誘導・祈祷・宿泊などの世話をする者をいう。「口弁り」は弁舌が巧みなことで、ここはシャベクリと読めばよい（音読符があるのは訓読符の誤りと見られる）のであろう。

誰あだし野ぞ籠仏とは

艶士

名才6 雑 無常・釈教

〔句意〕誰の墓所であろうか、この籠のような仏があるのは。

〔付合〕①前句をよく話をする案内人と見込み、②案内を受ける側の質問にもよく答えるであろうと考え、そうした際の問いを具体的に案じ、③籠仏があるのは誰の墓所なのかという、尋ねかける言によって一句とした。

〔備考〕「あだし野（化野）」は現在の京都市右京区嵯峨にあった葬送の地で、前掲の「鳥部野」と併称される場所であった。また、そこから転じて墓所のことをいい、ここもその意であろうと解される。「篋仏」は未詳ながら、「篋」は竹・木などを細長く平らにした道具であるから、薄い材に刻した仏像なのであろう。あるいは、仏像を刻んだ板碑をさしているのかもしれない。察するに、ここは遠慮ない言い方をする参拝者を想定し、「何だ、この篋みたいな仏像は」と、その人の口調を創作したものと見られる。

当年も崩れず送る崖の家

嵐雪

名才7 雑 山類・居所・述懐

〔句意〕崖つぶちの家は今年も崩れることなく、無事に毎日を送っている。

〔付合〕①前句から無常のさまを感じ取り、②生死一如の觀念から危険と隣り合わせの暮らしを具体的に案じて、③今年も崩れることなく暮らす崖の近くの家であるとした。

〔備考〕「当年」は今年で、これを歳末の感慨と限定的にとらえる必要はない。

「崖の家」は山腹や川岸などの険しく切り立った所に建てられた家。ちなみに、嵐雪は元禄八年一月に法体となり、禪を修める身となっていた。

散人の身に蛍雪も塵

無倫

名才8 雑 人倫

〔句意〕世間を離れた身には、蛍雪の故事も俗世間の塵に等しい。

〔付合〕①前句をひっそり自足的に暮らす人と見て、②世俗を徹底的に排除するさまを想像し、③散人の身には蛍雪の苦学も俗に感じられるとした。

〔備考〕「散人」は世の役に立たない人の意で、俗世間を離れて暮らす人や職を離れた人をさすことが多い。「蛍雪」は、晋の車胤が蛍の光で書を読み、

孫康が雪の明かりで書を読んだという故事（『晋書』『車胤伝』）から、苦勞して勉学に励むことをいう。「塵」は草の名をさす字ながら、ここは「塵」に通用させたとおぼしく、俗界の汚れをさすと見てよかろう。刻苦しての学問も、それが名や功のためであるならば「塵」に等しいということであり、その根底にあるのは無為自然を尊ぶ老荘の思想に相違ない。なお、当時は林希逸注の『老子』『莊子』が広く読まれ、これは朱子学や禪の考えを取り入れている老荘理解であった。

麦好きの米をもませぬ常の汁

艶士

名才9 雑 人倫・食物

〔句意〕麦好きの者は飯に米を混ぜることもせず、卓にはいつもの汁がある。

〔付合〕①前句から自分の信条に徹する人物像を見込み、②その人が自らの規範に従って暮らすさまを想像し、その一端を具体的に示そうと考え、③米を混ぜない麦だけの飯を好み、いつも同じ汁を添えているとした。

〔備考〕「麦好き」は麦の飯が好きの人。「麦飯」といえば、米に麦をまぜて炊いた飯も麦だけを炊いた飯もさし、いずれにしても、普通は貧しさゆえ麦を多く食べる場合が多い。ここはそうではなく、麦が好きで米を混ぜないというところに、この人の一つの癖が見てとれる。「常の汁」はいつもの代わり映えがしない汁ということであろう。

松の手に埋みこんにやく

止水

名才10 雑 植物木

〔句意〕松の手入れをしたついでに、蒟蒻芋を埋めておく。

〔付合〕①前句を儉約ゆえの所為と見換え、②この人なら普通は他人に頼むようなことも自分でするだろうと考え、その具体例をあれこれ探り、③庭の

松の手入れもするし、蒟蒻の芋まで土に埋めるとした。

〔備考〕「松の手入」は松の木のよい状態を保つために世話をすること。庭師に頼むこともしないのであり、暇のある豊かな家の者などが想定される。「埋み」は土の中に埋めることで、ここは蒟蒻の芋を埋めるものと解される。食材としての蒟蒻は、すり下ろした蒟蒻芋に灰汁を加えながら煮て作るもので、芋が腐りやすいため、収穫期にしか食べられない難点があった。そこで、乾燥させて粉にする方法が十八世紀後半に発見されるまでは、他の根菜類と同様、紙などに包み土中で保存したわけである。ここでわざわざ蒟蒻を選び出したのは、前句の麦飯に合わせて、粗食を強調するためなのであろう。

花青磁はなせいじ 鐘かね 瑤ぎょう つけてこかし置おく

無倫

名才11 春三月(花) 花の句

〔句意〕青磁の花器にひび模様を付け、そのまま横にしておく。

〔付合〕①前句を万事にこだわりを通そうとする人と見込み、②芸術家気質の陶工を想定してその作業工程に思いを馳せ、③花いけ用の青磁器を釉のひびが入ったまま寝かせておくとした。

〔備考〕「青磁」は青緑色をした陶磁器のことで、中国・朝鮮のものが有名であるほか、日本でも江戸時代初期から作られて現在に至る。「花青磁」は花をいけるための青磁の器とおぼしく、これも虚の花の扱いとなる。それにしても、定座を大きく引き上げてまで花を出す必要があるのか、疑念が生じるところであり、「松」と「花」の関係性(『類船集』に「花↓松」「松↓花さそふ風」)に依拠しただけであるならば、小手先の技巧と言わざるをえない。「鐘瑤」は「鐘罽・鐘罽」などと書くのが正しく(「貫乳・貫入」とも)、陶磁器の釉薬(ガラス質の溶液)の表面に細かく入ったひび模様のこと、釉薬の厚さや焼き加減、冷却の速度などによって違いが生じるため、それが器

自体の価値を左右することにもなる。「こかし」は転がすことで、相手をだまして陥れる場合にもいう。ここはそのまま寝かせておくのであり、前句の「埋み」に応じた語の選択と言える。

朧月夜おぼろつきよの不断ふだん まんばち

嵐雪

名才12 春二月ないし三春(朧月夜) 月の句 天象・人倫・夜分

〔句意〕朧月が照らす夜の、いつものうそつきである。

〔付合〕①前句を古い品に見せかけるための処置ととらえ、②客に偽って高く売る場面を想像し、名残の月が未出であることも考慮して、③朧にかすむ月夜の、例の嘘八百であるとした。

〔備考〕「朧月夜」はおぼろにかすんだ春の月夜をいい、『毛吹草』等に二月の扱いで、「朧月」は諸書に兼三春とされる。「不断」は途絶えなく続くことをいうほか、「普段」に通じ、いつもの状態の意にもなる。「まんばち」は万に八つしか本当のことがないの意で、うそ・でたらめやそうした虚言をよく言う人をさす。「花」に「朧月夜」を付け(『類船集』に「朧月夜↓花の峯」)、「こかし置」に「まんばち」と応じた四手付ながら、茫洋とした朧夜の風情が人を丸め込む場によく見合っていることもたしかである。

包解つつみ 袖そでの臙魚えいぎょに東風和こちなせて

止水

名ウ1 春一月ないし三春(東風) 生類魚

〔句意〕袖の包みを解いて虎魚を出すと、ちょうど東風も静まって。

〔付合〕①前句を朧月夜にいつもの酒を飲む意に取りなし、②酒宴の場に肴をもって現れる人を想定し、③包みを解いて袖から出した虎魚に、春風も収まっているとした。

〔備考〕「まんばち」は酒の異称でもあり、しばらく尋常ならざる人事句が

続いたことから、この語を読み換えることで句境の転回を図ったと見られる。「鰻魚」は「虎魚」とも書き、オコゼ類の魚をさして、食用のオニオコゼをいうことが多い。「東風」は東方から吹く春の風で、『毛吹草』等に一月、『はなひ草』等に兼三春の扱ひ。「和て」は「風て」に同じく、風がやんで海面が静かになることをいい、ここはただ風が静まることであろう。

名ウ2 雑 生類獣・述懐

艶土

〔句意〕 兎の尻には年ごとに穴が増えていく。

〔付合〕 ①前句を土産の品を取り出す場面と見定め、その品がやや珍しいことにも目をつけ、②いつも同時期に同じ品を手を訪れる客がいるとして、迎える側がそのことに対してつづやきそうな文言を探し、③これはよく言う「兎の尻に年々の穴」であるとの、感想の言によって一句とした。

〔備考〕 「兎の尻」に関して、『嚙ことわざ大辞典』（小学館）には「兎の尻の穴は年々ふえる 俗説」とあるも、意味・出典等は未詳で、江戸時代の俚諺書を博搜した加藤定彦他『俚諺大成』（青裳堂書店 平成元年刊）にも見あたらない。それでも、『類船集』に「年の数↓兎の尻の穴」とあり、「いつの間」に又一つよる年のくれ／うさぎのしりのあなう世の中 貞室（『玉海集』）の付合例をも参照すれば、同じことのくり返して毎年を過ぎす意とおぼしい（想像をたくましくすれば、兎の多産性に基づくのかもしれない）。ともあれ、俚諺そのまま使つての付句は、江戸座系の俳書などにしばしば見られるもので、この句はそれにつながる事例ということになる。

藪の樹は皮は割れて太りけり

嵐雪

名ウ3 雑 植物木

〔句意〕 藪の中の木は、樹皮が裂けていても幹は太っている。
〔付合〕 ①前句が俚諺の引用であることに目を留め、②同じく故事や格言めかした一句を出そうと考え、『莊子』の俳諧化を目論んで、③藪の樹木は皮に裂け目はあっても太っているとした。

〔備考〕 「藪」は草木や竹が手入れをされることもなく乱雑に生い茂っている所。その中の木であるから、何かの作用で樹皮に亀裂は入ろうとも、切り倒して使われることはない。つまり、天寿を全うするのであり、初期俳諧（ことに談林）で好まれた『莊子』の「無用の用」を一句にしたものと見られる。「兎」から想起されるものとしては、一つに「守株」の故事があり、その賢しらに對して、自然に任せる樹木の姿を出したとも考えられよう。また、もう一つのものに因幡の白兎伝説（『古事記』における「稻羽之素兔」）があり（佐藤淳一氏の教示）、海水をつけた皮膚が乾いて裂けた話により、「兎」から「皮は割れて」が導かれた可能性は大きい。

封疆を麴の室に片里

無倫

名ウ4 雑 居所

〔句意〕 この片里では最も端の地に麴室がある。
〔付合〕 ①前句を藪の実景と見て、②人が少ない辺地の集落を想定し、作業や生活の基盤は共同のものであるかと思ひやり、③片里の境界をなす地には共有の麴室があるとした。

〔備考〕 「封疆（封境）」は国や領土の境をいい、ホウキヨウの読みが一般ながら、ここはハテと読んでおく。「麴の室」は麴を製造するための温室で、米・麦・大豆などに麴カビを繁殖させた麴は酒・醤油・味噌などを醸造する際の主要原料となり、自給自足が基本の農村生活には欠かせないものであった。

「片里」は辺鄙な地方。

五器ごきふせて菴むしうの銭に人まつし待

艶士

名ウ5 雑 人倫

〔句意〕御器ごきを伏せ、菴むしうの上には銭を用意して人を待つ。

〔付合〕①前句から共同体意識の強い土地柄と感じ取り、②本来が花の定座であることから、人々の集まる花見の宴席を想定し、③伏せた御器や菴の上の銭など、準備も万端で人を待っているとした。

〔備考〕「五器」は「御器」とも書き、食物を盛るための蓋付きの椀などをいう。

「菴の銭」は菴の上に銭があることで、この「菴」は宴席に敷くものと見られよう。なお、両替屋では反古紙を繕って作った菴の上で銭を扱ったことから、「銭」と「菴」は縁のある語でもあった。「し」は指示して強調する働きをもつ副助詞。花見の支度が調い、相客の到来を今や遅しと待つ場面であり、すでに「花」は六句前に出ているため、花の定座で「花」を使わずにそれと匂わせる、配慮の末の一句と言ってよいだろう。

鴉からすの婚よめり珍しく見る

止水

挙句 雑 生類鳥

〔句意〕鴉の求愛行動を珍しいものとして見る。

〔付合〕①前句で人を待っていることに着目し、②手持ちぶさたから周囲を見回すこともあると考え、その目に映りそうな光景を想像し、③鴉の交接を見て珍しく感じるとした。

〔備考〕「婚」は結婚・求愛・交尾などを意味し、ヨメリ・トツギ・ヨバイ・ツルビなどの読みが考えられる。『日本霊異記』中・二に「雄の鳥…食を求めて行ける間、他の鳥通たがひに來たりて婚ツルビ」という用例もある(岩波書店『邦訳日葡辞書』にも「婚 ツルブ」とある)ことながら、「鼠の嫁人」「狐の嫁人」などに準じて、ここはヨメリと読むことにする。前句が「花」を匂わせてい

たのを受け、やはり「花嫁」に通じる「婚」を取り上げたものに相違なく、芭蕉たちがやはり「花」の字は用いず、「隣へも知らせず嫁をつれて来て野坡／屏風の陰にみゆるくはし盆 芭蕉」(『すみだはら』「むめがゝに」歌仙)と詠み納めた例も想起されるところである。

以上の分析に基づき、付合のあり方について、一卷全体の様相について、嵐雪の参加について、それぞれ考えるところを記しておく。

付合に関しては、「浦紅葉」歌仙と同様、初期俳諧のような親句が皆無であることを、まずは確認しておきたい。たとえば、「箇輪を越え呼井の水の杓はねて 艶士／秋の鯉はたゞせんば煎 止水」(第三・初才4)の場合、前句の井戸から女性たちの語らいを思いやり、その発話の一つを付けたもので、実際にありそうな臨場感に富む場面と言ってよい。付いていないように見えて、実はたしかに付いている(しかも、その内容は具体的に興味深い)という、芭蕉が元禄期前半に切り開いた疎句の付け方は、蕉門の枠を越えて江戸俳壇共有のものになっていたわけである。とはいえ、詞の縁をまったく利用していないわけでもない。「打畑に退いた伏見惜ふ成り 艶士／花の中行 鐘ぞけうとき 止水」(初ウ5・6)など、花見の場に邪魔な槍を取り上げ、句作の工夫は十分と言えるものながら、そもそも舞台を「花の中」にしたのはなぜかと問えば、「伏見」と「花見」が一般的な連想範囲にあったからにほかならず、それがなければ関係性の理解に苦しむ付合と言える。これに続く「餅売が投置小判取かねて 無倫／此夕暮の鳥辺野を問フ 嵐雪」(初ウ7・8)でも、「餅売」を登場させたのは「花見」茶店「餅」の連想によつていようし、「鳥辺野」を選んだのも「餅」と「鳥」が付物であったことや「取」と「鳥」が同音であることをはずしては考えにくい。俳人たちにとつて、詞の縁はそれほど抜きがたい知識としてあったということで、そのこと自体が

非難されるべき謂われもない。問題は、それが付合の解体（詞の関連はあっても付いていない二句）を招きかねないことである。当該歌仙の場合、「浦紅葉」歌仙もそうであったように、その危うさは抱えつつ、二句による表現の志向もぎりぎり保たれていると言えそうである。何によつて付けていくか」という基本的な面においては、嵐雪が一座したかしないかの違いにかかわらず、二歌仙の間で大きな差が見られないということを、一つの結論として把握しておきたい。

一方、一卷全体では、似たような調子の句が続きがちなところに大きな問題（変化と多様性を尊ぶ文芸にあつては瑕瑾と言わざるをえない）があり、この点では、嵐雪の参加が一つの要因ともなっているようなのである。たとえば、「当年も崩れず送る崖の家 嵐雪／散人の身に螢雪も塵 無倫／麦好_キの米をもませぬ常の汁 艶土／松の手に埋みこんにやく 止水／花青磁罐 瑤つけてこかし置 無倫」（名オ7～11）では、嵐雪が崖近くに住む人を出し（この段階では仏教的な諦観が感じられる）、無倫がこれを世俗嫌いの人へ仕立て直したのを機に、こだわりをもって生きる人物（いわば変わり者の連続となる。平凡な日常生活に多く取材する芭蕉晩年の連句作品（そこにも問題がないわけではない）とは対照的であり、そのことは、嵐雪が「かすみ」派の面々と歩調を合わせなかったことにも符合する。しかも、「那波集を心ひとつの撰み種 止水／骨茶打込土釜蟹の眼 艶土」（初ウ9・10）と、何かの一事に夢中な人は少し前に出たばかりであった。また、恋の句が多いのも目に立つことで、「名月の礎来ル_ル程戸を明て 嵐雪／つめり啄_ツつ虫の叫き 無倫／漸寒み居_リ湯にはゆき石の音 艶土／我身にほれてなびく期もなし 止水」（初ウ11～名オ2）で見ると、その浮世調の展開は、嵐雪が「名月の礎」を詠んだのを受け、無倫が半ば強引に閨房の句としたことを契機とする。いずれも嵐雪・無倫の付合が起点であるのは、偶然の一致ではあるま

い。この一卷から見えてくるのは、嵐雪の句を無倫が都合よく（あるいは、嵐雪の嗜好を付度するかのよう）に受け取り、自らが好む句境を示せば他の連衆もそれに従う、という構図である。亭主役の無倫は、捌き手として一卷の進行に意を払うことはせず、興に任せて（時に「興」を作りつつ）巻き進めているのであり、それは時に式目上の問題（転じを軽視した同一句境の連続は、基本的に連歌・俳諧では避けるべきものとされる）を引き起こすことにもなる。こうした点は、「浦紅葉」歌仙と比較しても目立つことなのであり、嵐雪の参加を重視する無倫の意識が、自ずと生み出したことなのであろう。

芭蕉が没して三年。その晩年の志向が支考らによつて継承される一方、都会的な俳風をよしとする面々も力を得ていこうとする時期に、この一卷が興行されたことの意味は小さくない。もはや俳諧よりも仏教に傾倒していたとされる嵐雪の本意はともかく、無倫の側から見れば、嵐雪も非「かすみ」派の同士の存在と感じられたに相違なく、だからこそ、〈変わり者〉や〈浮世風の恋〉などを積極的に打ち出して見せたわけであろう。しかも、芭蕉によつて開発された付け方の基本はすでに共有されているから、一座していて格段の違和感が生じることもない。こうして、芭蕉流の手法（ただし、それも少しずつ変異していく）を使いながら、芭蕉がめざしたのとは別の方向に向かう俳諧が、進められつつあつたわけである。嵐雪らの他の作品も視野に入れることで、この間の事情をより明確なものとしていくことにしたい。

佐藤 勝明（和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 教授）

（令和二年十月十三日受理）